



特定領域研究

実験社会科学 ニュースレター

2011年6月17日
第5号

この号の内容

1. はじめに
2. 「節電の夏」
社会班 清水 和巳先生
3. お知らせ
4. 編集後記

1. はじめに

特定領域「実験社会科学」ニュースレター第5号では、社会班で行われている研究内容の一部を、ご紹介させていただきます。

社会班では、清水和巳先生(早稲田大)、芹澤成弘先生(阪大)、渡部幹先生(早稲田大)、沈先生(広島市大)を中心に、人間の関係性の疎密や暗黙のルールが存在など『社会関係資本』に関して、実験によって具体的に明らかにしようと試みが行われています。

本号では、清水和巳先生にご依頼して、現在の研究について、社会状況とまじえて、ご紹介させていただきます。

2. 「節電の夏」

社会班 清水 和巳 先生 (早稲田大学政治経済学部)

今年、3月に起こった東日本大震災・津波によって東北地方の原子力発電所が破壊され、機能は停止し、その再開のめどはまるでたっていない。それどころか、原子力による発電の是非自体に大きな疑問符が付されています。関東の今年の夏が節電の夏になることは間違いありません。この夏が去年のような酷暑ではないこと祈るのみですが、平年通りの暑さだとしてもクーラーなしで都会の夏を過ごすことは難しいでしょう。自分のことだけを考えるなら、みんなが節電している中、クーラーの効いた部屋で過ごすのが一番です。つまり、各人は他人の節電に「ただ乗り」するインセンティブを持っています。しかし、みんながそう考えてクーラーを使い始めると大停電が起こってしまいます。こういう状態を社会科学では「社会的ジレンマ」と呼んでいます(厳密に言うと、節電問題は閾値ありのジレンマ問題なので、大停電になるかならないかのギリギリの状態—閾値—では、人々は節電するインセンティブも持っていますが)。私が属する社会班では、こういうジレンマの時に、どうすれば人々は協力(今の文脈でいえば「節電」)するのか、どういう人々が協力するのか、を実験研究によって研究しています。ここで紹介する研究は二番目の「どういう人々が協力するのか?」という問いにかかわっています。

"ただ乗りの
インセンティブ!?"

"どういふ人々が協力する
のか?"

近年、「ジレンマ状況で協力する人はきちんとリスクを評価している人だ」と主張する研究が出てきました。直感的に言うと、相手がどう行動しようが自分はお構いなしに行動する人ではなく、相手がどう行動するのかによって自分の行動を変えることができる人、そういう人が協力できる、という感じでしょうか。そこで、私たちは人々がリスクに対してどのような態度をとるのかを、カーネマンとトベルスキーが使用した「生死問題」を使って検討しました(カーネマンはこれも含む一連の研究で 2002 年にノーベル経済学賞を受賞しています)。私たちは以下のような問題を全国世論調査の質問紙に組み込んで、答えてもらいました。

このような事態を想定してください。あなたの町で、緊急に治療しないと命を落とす可能性のある病気に 600 の人たちがかかったとします。この病気に対しては、科学的に効果が確認された、次の A と B のふたつのプランがあります。



- A. プラン A では、確実に 200 人が助かります。
B. プラン B では、3 分の 1 の確率で 600 人が助かりますが、3 分の 2 の確率で一人も助かりません。

あなただったら、AとBのどちらのプランを選びますか。

この問題は「利益のフレーム」と呼ばれています。そして、もう一つのヴァージョンとして「損失のフレーム」を用意し、同じように答えてもらいました。「利益のフレーム」と「損失のフレーム」の違いは、前者では「プラン A では、確実に 200 人が助かります」であるのに対して、後者では「プラン A では、確実に 400 人が亡くなります」という表記上の違いだけです。カーネマンとトベルスキーはこのフレームの違いによって、人々が「損失のフレーム」では「利益のフレーム」よりもプラン B を選択する、つまり、リスクを取るようになるということを示しました。この効果は「フレーミング効果」と呼ばれています。私たちの実験ではこれに加えて、先の問題文の 600 人を 60 人、6 人と少人数サイズにしたヴァージョンも用意して回答者に答えてもらいました。その結果「フレーミング効果」だけではなく、サイズが小さくなるにつれて人々がリスクを取るようになるということが安定して観察されました。この効果を「サイズ効果」と呼んでおきましょう。

"フレーミング効果"
と
"サイズ効果"

さて、「生死問題」のプラン B は、確実に 200 人が生き残るプラン A と比較して、リスク志向のプランと通常は解釈されます。しかしながら、このプラン B は見方を変えると集団全員に生存するチャンスを平等に、つまり誰にでも生存確率 1/3 を分け与えるプランだと解釈することもできそうです。とすると、われわれは事態を「損失」の局面ととらえ、そこで対象になっている人々を親族や仲間だと思うのであれば、生死にかかわるチャンスを平等に分配すべきだと判断しやすくなる、と言えるのかもしれませんが。

"節電という行動"

確かに、チャンスの平等分配への志向がすなわち節電という行動に直接つながるとは思えません。しかし、東京 23 区に住む人々が事態を「損失」の局面（例えば「普通の 70%の電力しか使用できない」）にとらえ、住んでいる地域を身近に感じれば感じるほど、少なくともトップダウン式の計画停電よりも、各人の行動の結果が全員に同じように降りかかる節電プラン（つまり、節電に失敗して大停電か、節電に成功して正常な生活）の方を、是とするのではないのでしょうか。そして、逆に、23 区の住民が事態の深刻さを軽視し、関東圏に対して親近感を持っていないとすれば、23 区以外の地域を計画停電にして、自分たちは従来通りに電気を使えるという計画を是とするのかもしれませんが。

われわれは「サイズ効果」が生まれるのは、対象となるグループの人数が小さくなるにつれ、人々はその集団を親族や共同体とみなし、生死のチャンスを平等に分配する心性もっているからではないか、と考えています（この仮説を検証する実験を現在も行っていますが、現在のところ肯定的な結果が出ています）。

3. お知らせ

2011 実験社会科学サマースクールは、東日本大震災等の影響で、本年度はウィンタースクールとして開催する予定です。詳しい日程等、詳細が決まり次第、随時、実験社会科学のホームページにアップしていく予定です。

実験社会科学ホームページ:

<http://www.iser.osaka-u.ac.jp/expss21/>

特定領域研究

発行元 : 大阪大学 社会経済研究所 西條研究室

〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘 6-1

TEL: 06-6879-8582

FAX: 06-6878-2766

E-mail: secsaijo@iser.osaka-u.ac.jp

Web page: <http://www.iser.osaka-u.ac.jp/expss21/>

4. 編集後記

今回の第 5 号を刊行するにあたっては、社会班の清水和巳先生にご尽力いただきました。心から感謝申し上げます。次回は、意思決定班を特集します。

また刊行が大変遅くなりましたことを心からお詫び申し上げます。

一般の皆様からの御意見や御質問もお受けしております。さらに、何かニュースレターで取り上げてほしい内容等も随時受け付けております。特定領域研究発行元までご連絡下さい。